

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02069

研究課題名(和文) 中世の紀伊半島における歴史遺跡・名所の創作および保存・活用事業データベースの作成

研究課題名(英文) Creation of a database for the creation, preservation, and utilization of historical sites and landmarks on the Kii Peninsula in the medieval period

研究代表者

海津 一郎 (KAIZU, ICHIRO)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：20221864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：紀伊半島は世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣通」登録にみられる如く、多様な名所旧跡・宗教遺跡が散在する。その成立過程を包括的に分析するのが本研究の課題である。

ほぼすべてが、中世成立期の禅律僧勢力(旧仏教の改革派)による民衆組織の過程で作られた遺跡であり、時宗教団による熊野王子興行1221年、明恵教団による湯浅遺跡興行1230年、律宗教団による高野山町石道興行1281年の3波が画期となり西国全域に「遺跡興行(復活)」の政治運動が広がった。

中世に惣国一揆が滅亡して以後も、紀伊半島では遺跡創作の伝統が長く生き続けて、平家物語・太平記・小栗判官・道成寺・苅萱など虚構の史跡捏造が広範囲で行われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、一部の埋蔵文化財を除いて、今日諸文化財指定・世界遺産登録されている紀伊半島の歴史遺産は、大半が中世起源の創作と認定される。さらに、そのなかの相当数が、現在の所伝とは異なる由緒をもつ創作遺跡であることが明らかになった。したがって、中世以来の史跡指定事業は、誤った歴史認識を地域民衆に摺込んだという負の側面をもつ。

だが、その一方で、地域民衆に歴史への関心と呼び覚まして、文化遺産の大切さを伝えたという意義もある(この点で、近代の皇国史観による勤王史跡指定などの歪なナショナリズム摺込みとは大きく異なる)。このような中世の史跡指定事業の功罪両面を踏まえることで今日の観光行政に自省を促す。

研究成果の概要(英文)：Various sites of scenic beauty, historic interest and religious remains are scattered in the Kii Peninsula as registered as a world heritage "Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range". It is a problem of this study to comprehensively analyze the formation process.

Almost all of them were the remains which were produced in the process of popular organization by ZENRITUSO force (a reformist sect of old Buddhism) in the establishment period of the medieval period, and three waves of Kyogyo in Kumanoji by Jishu sect in 1221, Kyogyo in Yuasa by Myoe sect in 1230, and Kyogyo in Koyasan Choishi-michi by Risshukyodan in 1281 became epoch-making and the political movement of "Remains performance" spread all over western part of Japan.

Even after the fall of the sokoku-ikki in the medieval period, the tradition of creation of remains continued in the Kii Peninsula, and fictitious historical sites such as Heike Monogatari, Taiheiki. etc, were fabricated in a wide area.

研究分野：観光学

キーワード：捏造 名所旧跡 禅律僧 遊行上人 遺跡 自力救済 観光学批判

1 研究開始の当初の背景

本研究では、中世紀伊半島（紀州惣国）の禅律僧勢力によって組織的に推進された歴史遺跡・名所旧跡の認定事業の事例を網羅的に検出して、創作主体・意図・活用方法などを考察・整理したデータベースを作成する。この作業によって、歴史遺産を調査・保存し、観光資源として活用・広報する事業の起源と実態を明らかにする。その際、データベース中の史実ではない「捏造された歴史遺産」について、現在の文化財行政および観光行政における位置付けを確認し（世界遺産登録・史跡指定など）、観光資源として活用することの是非について考えるための基礎史料を提供したい。

以上が、研究開始時に記述した概要である。この時期は、博物館法の改正に伴う文化財保存行政の転換期であり、観光資源の活用についての学問的な裏付けが不可欠と考えていた。

2 研究の目的

（1）中世の神領興行運動における歴史的遺跡・名所旧跡の創作活動の歴史学的考察

本研究では、主に禅律僧勢力によって推進された名所・旧跡の認定事業の事例を網羅的に分類整理して、権門体制と呼ばれる中世支配権力の独自性を明らかにしたい。

歴史遺産の捏造という点、近世・近代における「天皇陵」命名などが想起されるが、実は中世の代ほどに膨大な歴史名所・遺跡が創作された時代は他にない。中世的支配の正当性は「徳政」（あるべき過去の復活）であり、支配勢力は自己に都合の良い歴史物語作りのために、遺跡・名所を捏造していった。このようにして摺り込まれた中世の歴史認識の枠組みが、現代の歴史観を規定している側面についても明らかにしたい。

（2）上記の先行研究と準備

中世的支配の正当性は「徳政」（あるべき過去の復活再現）であり、公武の支配権力は自己に都合の良い歴史物語作りのために、歴史遺産の活用を推進した。とくに紀伊半島においては、16世紀に紀州惣国という寺社勢力の連合国家が成立しており、この傾向が顕著だった。

歴史学・日本史・宗教史には、このような研究視角は見いだせないが、隣接科学に手がかりとなる先行研究を発見した。中世文学の分野では、大橋直義氏の巡礼記研究が、14世紀を中心にして貴人の名所・旧跡のガイドが整備されて寺社勢力ごとに歴史物語の再現が試みられていることを明らかにしている（『転形期の歴史叙述』）。また仏教考古学の分野では、中世石塔の由緒を追究した山川均氏が、禅律僧が聖地のモニュメントとして造塔活動をおこなっている事例を集積している（『歴史のなかの石造物』）。神領興行運動による顕密仏教勢力の地域支配という歴史的文脈から「観光資源」を位置付け直すことが求められよう。

（3）観光行政と文化財行政の懸隔を埋める課題

文化財・文化遺産の保護行政が行き詰まりを見せる中で、観光資源として活用することによって状況を打開しようという研究動向が進んでいる。観光開発行政のサイドにおいても、欧米富裕層の招致のために「スピリチュアル」な「伝統文化」を求めて、歴史遺産に着目する傾向が強ま

っている。今回申請の研究は、このような観光資源をめぐる課題に対して、即効薬とはならないものの、長期的な解決の手がかりを提起したい。中世の支配権力が組織的に推進した遺跡・名所の創作・活用が、時空を超えて「現代の紀伊半島の文化状況に何をもたらしたのか」について俯瞰できるからである。

3 研究の方法

(1) 紀伊半島中世遺跡の現況確認と特性の分類

中世における歴史遺跡の再建・顕彰が、支配の正当性と直接関わるものであるという想定のもとで、網羅した事例を分類したい。紀州惣国をフィールドに集めた事例、国文学の巡礼記研究で設定された地点、山川均氏の石塔事例を基にして、〈遺跡名 再現形態 関わった主体、その後の中興、再現年代、随伴するアイテム、民衆世界への影響、出典、史跡の現状、真実性、言及文献〉を属性として分類して、捏造のパターンを検討する。たとえば、明恵生誕地 木製塔婆 喜海 湯浅党 1235年 施無畏寺文書 国史跡 史実と異なる捏造 高橋修 1996・1998 など。単なる寺院や仏像一般については事例が膨大になるので省略する。

とくに遺跡記念碑(モニュメント)については、特定政治目的が表出する史料であるから、可能な限り現地調査して原状確認・記録保存し、後世への規定性について把握する。中世時点で失われている廃寺跡にモニュメントを建てた場合は、神領興行運動の枢要行為となるので取り上げる。

(2) 地域から世界史へ、新科目「歴史総合」をめぐる学会立上げ

観光学を通じた地域連携の試みとして、地域教材を用いた社会科教育・理科教育の材料を提供し、それを活用できる教員の養成にかかわりたい。とくに紀伊半島の歴史・史跡は、中世の顕密体制、禅律僧によって中国沿海・倭寇世界に関わっており、世界史的な位置づけができる点で特徴的である。研究成果をもとにして、紀伊半島世界史研究会を立ち上げて学校教員と共同研究を行い、2022年施行の高校新科目である「歴史総合」(世界史と日本史の融合科目)発足にむけた教科書作りを行いたい(2018年度にミネルヴァ書院より刊行された)。

さらに、文化財行政に一石を投じるために、展示叙述のかたちで研究成果を公開して、その図録を報告書の一部として広報したい(2020年1-2月に企画展実現、同3月図録を刊行)。

4 研究の成果

(1) 荘園遺跡からみた名所・旧跡等観光資源

遠隔地荘園の再建・維持活動

荘園遺跡において、古代中世にさかのぼる著名な史跡がある場合、そのすべては当該荘園領主による地域支配のツールとすることができる。これらの荘園は、ナワバリ(領土)を持つ中世領域型荘園である(小山靖憲説)。したがって、その領域を維持するために導線部と境界部とに自

己のランドマークを建てた。特に、荘園支配の正当性（由緒）が過去の歴史に求められた徳政の時代にあっては、支配勢力の有名人や信仰聖跡が創作された。笠田荘の「文覚井」（県指定史跡）や山東荘の「覚鑿堂」群、小川荘「弘法井戸」など、灌漑施設や山野用益の結界・宗教聖地などに荘園遺跡の構成要素が集中する。これは神護寺の文覚、高野山の覚鑿・覚心ら、典型的な禅律僧の勢力によって、荘園経営が進められた事例である。

同じ領域型荘園・公領においても、著名人に結びつけられた史跡が集中している場所がある。先に挙証した3所はそのような史跡密集地である。一方、多様な古層を残すと思われる天野盆地（中世六ヶ七郷天野郷）などは、著名度に比して史跡残存の希薄地である（もちろん相対的な問題だが）。このような差異を生むのは、荘園領主勢力の経営能力がひとつ。ふたつには、領主が京都や鎌倉に居る、遠隔地荘園であると考えた。天野郷は本来仁和寺御室荘園だが、鎌倉期を通じて高野山の膝下荘園として維持されていた。隔絶した立地であり、周辺に敵対勢力がない。支配者にとっては安全な領土といえるだろう。一方、教科書で取り上げられる笠田荘は、北・東を高野山金剛峯寺、西を粉河寺、南を根来寺に包囲され孤立した神護寺領荘園であり、地元寺社勢力と戦い抜くための方策が必要だった。絵図・帳簿の作成や超人文覚の伝承を再現する施設（橋・井戸・修行滝・用水・池・相撲土俵場などなど）が創作された。その歴史は学術専門書の一冊をもって提示したほどに豊かな内容である。史跡創作という観光学の観点から概観することで意義があきらかになった。山東荘は、後発の領主・伝法院が高野山の支配する未開墾地のなかに作られた巨大荘園である。それだけに、用水池覚鑿池（現大池遊園）を軸にして範域に覚鑿関係遺跡を縦横に配置する必要があった。南部荘は金剛峯寺のもつ国内の遠隔地荘園であるが、千里浜（山内）西行庵や往生要集の源信遺跡・融通念仏導御勸進の巨大板碑群など、他所ではみられない聖地空間が再現されている。前例のない大井用水のような複雑な河川灌漑システムも創出されている。

神領興行運動の骨格

紀伊半島では、次の過程で大規模な神領興行のムーブメントが起こった。

イ 承久の乱後、鎌倉幕府による熊野古道沿道王子の再興命令

ロ イに学んだ湯浅党武士団による明恵遺跡の興行運動（喜海教団の後押し）

ハ 蒙古襲来を契機とする安達泰盛・北条得宗政権による町石道の興行（高野山律宗と連携）

ニ 八に対抗した伝法院の根来寺興行、および日前宮領興行（法灯派臨濟禅勢力）

ホ 後醍醐天皇による御手印縁起興行、紀州が「神の国」となる端緒 ～ 14世紀

先に検証した禅律僧の運動は、こうしたムーブメントに誘発され、民衆世界を活性化した。これ以後については、すでに研究史上に明らかにされているように宗教共和国連合＝紀州惣国一揆の支配が定着した（1585年秀吉の侵攻で壊滅）。

（2）熊野古道の名所旧跡 時宗の創作

熊野詣での研究のうちで、近代的な旅行業者機能について言及したものは多い—そのアイテムとしての護符・曼荼羅やツール技法としての絵解きなど—。先達や熊野比丘尼・聖たちが、参

詣道の史跡・名所について熟知して観光案内をしたであろうことも想定されている。では、その名所・史跡はどのようにして創作され管理されてきたか。

現在の本宮と時宗のかかわりは強い。各所に一遍遺跡が作られて、本宮大社は毎月一遍上人命日行事を実施している。小栗物語の創作過程は不明だが、それを流布した主体は遊行寺を仰ぐ時宗の聖であると考えてよかろう。近年、小野沢眞氏は宗門史に収斂しない時衆の多様な活動と特色を明らかにしていた。

熊野古道の名所旧跡を蒐集したデータベースを分析すると、中世の参詣記中で王子以外の名所・旧跡が記述されるのは実は少ない。周知の名所も、江戸時代の後期に紀州藩肝いりの網羅的な地誌2冊によって初めて記載されるものが多い(もっとも、合理的な思考を持つ続風土記では、「土人の妄言」と併記したものがあり、排除した場合もあろう)。

中世に沿道の「旧跡」が確認された事例として、藤白坂の「巨勢金岡の筆捨松」伝説がある。室町期の後崇光院実意参詣記『北野殿熊野参詣記』応永34によると、9/22条「藤代たうけにて片箱身上、守護方より御たる折済々まいる、此所の眺望いまさらならねとも、誠二金岡か筆もおよ八さりけんこと八りなり」と。現在の伝承は、金岡が童子(実は熊野権現)に増長を戒められたというもので、紀州藩頼宣はこの話を重視して、近くに酒船石のような巨大な石硯を作った。

この中世事例は、藤白坂(熊野の入り口)で時宗の管理した空間であるが、沿道の名所は次の3つに分類された。

政治文化の敗者の鎮魂

有間皇子 淳仁天皇 源義経 奥州藤原秀郷 平維盛ら小松系 後鳥羽上皇

天武王統(飛鳥奈良朝)

藤原不比等(武内宿祢)宮子・聖武天皇 孝謙称徳女帝

時宗管理物語

小栗・照手 深蛇池 一遍遊行上人関係

(3) 世界とつながる紀伊半島

前項で見た荘園・巡礼領域における禅律僧の活動は、15・16世紀以後にいたり、寧波との交流に拡大して世界的な視野を広げた。紀伊半島の史跡には、移民文化の近代以後はもちろん、前近代においても世界とのつながりが見いだせる。本研究では、それを意図的に収集した。おりから、世界史と日本史の融合が急務とされており、現場の教員と連携して事例の収集作業を試みた。

驚くべきことに、中世の禅律僧が行った歴史の創作や書き換えの手法は、形を変えつつも近代・現代に継承している事実が明らかになった。成果品としてあげた著書『企画展 紀伊半島から考える日本史』では、40項目の地域事例(名所旧跡)を取り上げて日本の通史を描いてみたが、実にその過半数の26事例が政治的意図のもとに史実を書き換えた捏造遺跡であった。

教員による教材化の運動として地域史料の収集事業を続けることで、歴史学と観光学の懸隔を埋めていく展望を得たと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 69
2. 論文標題 後醍醐天皇による「御手印縁起」の制作	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要 人文科学	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 海津一朗	4. 巻 2
2. 論文標題 高揚する民衆運動－異国征伐を選んだ紀州民衆の姿	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 紀州研ニュースレター・きのみなど	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 海津一朗	4. 巻 38
2. 論文標題 高野山御手印縁起と中世国家－紀州惣国一揆の歴史的前提	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） URI http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/metadata/3264	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 海津一朗	4. 巻 68-1
2. 論文標題 秘仏・高野山南院「浪切不動明王」考－弘安の蒙古襲来と志賀島－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 81-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/metadata/3286	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 816
2. 論文標題 紀伊半島が世界史を変える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 92-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 2019
2. 論文標題 歴史総合を考える 世界史とつながる日本史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学術の動向 科学と社会をつなぐ (日本学会議)	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 34
2. 論文標題 地域から考える「歴史総合」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本歴史学協会年報	6. 最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 6
2. 論文標題 紀伊半島における「歴史」創作	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌山大学紀州経済史文化史研究所きのみなと	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海津一朗	4. 巻 70
2. 論文標題 惣国扱い衆と中世社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌山大学教育学部紀要 人文科学	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 6件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 地域から考える「歴史総合」ー紀伊半島からの視座
3. 学会等名 日本歴史学協会(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 地域から考える「歴史総合」「地理総合」ー世界史とつながる日本史の挑戦ー
3. 学会等名 和歌山県歴史教育者協議会2018大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 いま中世日本の国境地帯を考える
3. 学会等名 和歌山大学岸和田サテライト講演会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 楠木流兵学の起源
3. 学会等名 正忍記の会例会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 新科目歴史総合と紀伊半島世界史研究
3. 学会等名 紀伊半島世界史研究会例会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 紀伊半島から考える世界史
3. 学会等名 和歌山高校社会科研究会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 海津一朗
2. 発表標題 タケノコマンと山東地域の中世
3. 学会等名 山東町づくりの会講演会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 海津一朗・田城賢司
2. 発表標題 博物館と連携した地域教材の開発
3. 学会等名 和歌山大学・和歌山県教育委員会 連携事業報告会2019（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 海津一朗	4. 発行年 2018年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 252
3. 書名 新 神風と悪党の世紀	

1. 著者名 海津一朗・稲生淳共編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 世界史とつながる日本史 紀伊半島からの視座	

1. 著者名 藤田和史・東悦子・海津一朗ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 清文堂	5. 総ページ数 186 (3-12)
3. 書名 わかやまを学ぶ 総論わかやまの反逆者たちー追憶のSAYAKA	

1. 著者名 海津一朗	4. 発行年 2017年
2. 出版社 和歌山大学紀州経済史文化史研究所	5. 総ページ数 80
3. 書名 道成寺の縁起 伝承と実像	

1. 著者名 海津一朗編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和歌山大学教育学部海津研究室	5. 総ページ数 10
3. 書名 企画展 地域から考える日本史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

後醍醐天皇による御手印縁起の制作 http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/3508 高野山御手印縁起と中世国家 http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/3264 かんじゃサヨのいた村 あてがわ荘物語 http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/3381 中世紀州惣国の神いくさ : 2017太田城慰霊祭 http://repository.center.wakayama-u.ac.jp/3382

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考